

カトリック香里教会 聖家族 祝日 2020年12月27日

さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。また、主の律法に言われているとおり、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。 -中略- 親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。 -ルカ 22 章-

聖家族

司祭叙階後、間もなくして私はブラザー（修道士）とともに、日雇い労働者の街「釜ヶ崎」に派遣されました。ビジョンがあって出向いたのではありません。「必要とされる所に応えて行く」、それだけを心に街を巡っていた時、ある避難施設に入ろうとして断られている、酒の入ったおじさんを見かけました。

釜ヶ崎は酒を抜きにしては語れない世界です。このおじさんは道端で休み、夜は野宿するしかありません。ブラザーがつぶやきました「聖書のたとえばが此処ではこのように聞こえる『羊は弱くても99匹には98人の友達がいる幸せがある。一匹にされた羊の不幸は、それがたとえ自業自得であっても、世界に誰も友達のいない寂しさだ』」と。

既存の活動グループと同じように私たちも施設を構えておじさんたちを迎える活動になるのかと考えていましたが、ブラザーの一言で、施設を持たないで、「一匹」と関わることにし、私は二人の野宿者と三人で、一台のリヤカーを借りて段ボール紙の収集を始めました。

1キロ5円の段ボール紙を200キロ集め、得た千円で食事を分かち合い、日曜日には連れだって「ふるさとの家」でミサに与りました。そしてある日のミサ当番に当たっていた私が手に取った福音書が「聖家族の祝日」でした。不思議なことに、毎年「聖家族の祝日」の当番は私に回ってきます。家族との関わりがない一匹の彼らにこそ届く福音の必要を促されていると感じました。

三人は一台のリヤカーを、私は昼間預かって段ボールを集め、一人は夜間、粗大ゴミを集めて露天商を開き、体力のない老人はアルミ缶を集め、稼いだお金は夕方集まって、それを三等分するのです。私は言いました。「私たちのグループは力のある者が力のない者に奉仕するいいグループだね」と言うと「それはいい！」と彼らは涙ぐんでいました。

イエスは仰いました。「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか？ 神のみ旨を行う人、それがわたしの母、わたしの兄弟である」と。

わたしは彼ら二人のために、彼らはわたしのために、一日汗を流してくれました。彼らはもう一匹ではなく、支え合う家族を持つ人になったことに気づいたわたしは、「聖家族」を祝う意味をその時教えられました。

